

---

君。

葉

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】  
君。

【Nコード】  
N6223Y

【作者名】  
葉

【あらすじ】  
繭と晴哉、  
うちと君。

2人の切ない  
恋物語。

## プロローグ

中1の春。

こちらは出会った。

それは運命だったんだよ。  
きっと。

あなたに恋をした。

恋をしたのに

うちは君を

愛せなかったね。

うちが弱かったから。

自分の弱さが怖くて

君から逃げた。

ごめんね…。

いっぱい遠回りした。

君のいない季節を

歩んだよ。

だから気づいた。

いや、気づいてた。

君がいい。って。

君じゃなきゃだ。って。

君のいない季節は  
味気ないんだ。

君に出会ったせいで  
君を好きになったせいで  
苦しいよ…。

弱い自分が嫌いだよ。

だから強くなる。

君のために  
。

君は誰。

「市原繭、市原繭、市原繭…。」  
ぼそぼそとつぶやきながら  
うちは自分の名前を探した。

桜が舞っている  
椎名中学校の校庭にて。

今クラスの振り分けが  
張り出されたところだ。

「あつた…」

1年3組の名簿に  
市原繭という名前を見つけた。

うちは1人で3組の教室に向かう。  
周りは知らない子ばかり。  
こーゆー時、気軽に話しかけたり  
出来るタイプじゃない。

うちはひたすら階段をのぼった。  
1階、2階…。  
1年3組は3階にあった。

ゆつくりと教室の戸を開ける。

「繭!!」

「繭ちゃん!!」

教室からは聞き覚えのある声がした。

小学校の友達、  
あかね なつこ  
茜と奈津子だ。

「繭、あたしら同クラだねい!」

「これからも仲良くしよ!繭ちゃん!」

「うん!」

少しホツとした。

茜と奈津子、

大好きな2人が居てくれて  
助かった。

そしてうちは自分の席に向かった。  
席は50音順で勝手に割り振られている。

うちは廊下側の前から3番目に座った。  
市原だから女子出席番号は3。

茜と奈津子とはかなり遠い。

「はあつ。」

溜め息を吐く。

ふと左隣をみると

学ランを適当に着こなし、

寝グセのままのようなボサボサの髪で

うつ伏せに眠っている男子が

座っている。

男子出席番号3番の人だろう。

うちは黒板に張っている学級名簿を見た。

【男子出席番号3番糸井晴哉いといはるや】

この人は糸井晴哉というらしい。

君は誰。  
(後書き)

繭と晴哉の

まさに『出会い』です。

まだ接触もしてません。

次話もぜひ読んでください。



## 君の魔法。

ガラッ。

担任の先生らしき人が入って来た。

「担任の千葉ちばですつ。

1年間よろしくなあ。」

30代前半な若めの男。

しかし顔が…。

「チバって言うよりロバじゃね？」  
そう！ロバ！

うちの耳元で誰かが囁いた。

さっきまで寝ていたあの

糸井晴哉いといはるやとかいう

男子だった。

「あ、あ、うん。」

初めての人と話すのは苦手な方だ。  
すごい曖昧な返事になってしまった。  
ほんとは凄い共感してるのに…！

「う、うちもロバっぽいって思ったところだよ。」

「だよなあ！えと、お前…」

糸井晴哉がうちの左胸を見つめる。あ、名札ね。

「市原いちばなっつーんだ。」

ま、こーやって出会ったのも何かの縁かもだし  
よろー。」

「よ、よろしく。」

「なんか緊張してる？」

まさか俺に惚れて？笑」

ないないないない。

そんなボサボサに惚れないよっ。

「ただの人見知りっ！悪いっ？」

「人見知りかあ、ガキだな。」

「はあー？ム力つくー。」

「……。」

「えっ？何？？」

「緊張ほぐれたね。」

あっ…

ほんとだ。

いつの間にか、  
すごい喋れてる…。

「そこ、うるさいぞっ。」

ロバが言った。

「すんませーん。ロバ…あつ、千葉先生!!」

糸井晴哉の一言でクラス中が笑う。

肝心なロバは

気づいてないようだけど。

糸井が笑顔で

こっちを向いた。

「市原、改めてよろしく」

「よろしくっ!」

今度は元気よく答えた。

もう緊張とか不安とか

そーいうのが全くなかったみたい。

糸井晴哉は魔法使いなのかもね。笑

## 君の魔法。(後書き)

この千葉って先生、

私の学校の先生がモデルです。笑

名前は千葉じゃないけど

とにかくロバに似てます！

次話もぜひ読んでください。

## 君のタイプは。

「今からプリントを配る。

後ろに回してけー。」

担任のロバ（本名：千葉<sup>ちば</sup>）が言った。

うちは回されたプリントを見た。

【新入生部活動体験・正式入部について】  
と書いてあった。

部活かあ…。どうしょ。

茜<sup>あかね</sup>と奈津子<sup>なつこ</sup>と相談しよーかな。

トントン。

肩をたたかれる。

「ん？」

「お前どーすんの？部活。」

隣の席の糸井<sup>いとい</sup>だった。

「わかんない。茜と奈津子と相談するかなー。」

「市原<sup>いちばら</sup>ってアイツらと仲いいよね。」

俺<sup>しのづか</sup>的に篠塚<sup>しのづか</sup>が可愛いと思う。」

知らねえよ…。あつ、篠塚は奈津子の苗字。  
確かに奈津子はモテる。

「あーいうのタイプなんだ？」

「ちげーよっ！ほら、可愛いとタイプとは

「違うだろ??」

そーなの? そんなもんなの? まあ知らんけど…。

「おーいよく聞け!」

口バが声を上げた。

「今日から部活動の体験入部期間が始まる。

運動部に行くヤツは体操服で、

文化部に行くヤツは制服のままで、

どちらも手ぶらでそれぞれの部室へ行くよーにっ!」

どーしよーかな。糸井なにやるんだろ?

さっき話がそれて聞いてなかった。

「糸井は何部行くの?」

「糸井じゃなくて晴哉はるやって呼んでよ。」

「…は、はる……無理っ!! なんか糸井の方が  
しつくり来るよ! 糸井って糸井顔だし。笑」

「糸井顔って何だよ。笑

ま、いーや。慣れたらそー呼べよ!」

「ういっす。」

「じゃ、行くわ! また明日!」

糸井が体操服袋をもって立ち上がった。

「ばいばい。」

…あーっ!! 結局聞き逃したあ!!  
バカだ! 糸井顔とかまぢどーでもいい…。

「繭まゆちゃん」

「あ、奈津子! あれ茜は?」

茜の姿がない。

「あーたんはハンドボール一筋だからね！  
張り切ってハンド部いったよ」

茜は小学校の時からかつこよくて  
ハンド部の超頼れるキャプテンだった。  
6年最後の地区大会で優勝したのも  
茜のおかげってみんな言う。

「繭ちゃん。うちらどーする？」

「奈津子行きたいところある？」

「んー特にない…。」

「じゃあ…テニス部行ってみよ！」

「うん」

奈津子に言おうか迷ったけど言わなかった。  
なんか言えなかった。

糸井が奈津子のこと可愛いつて言ってたよ。って。

この時からうちには何かが芽生えてたのかな…？

糸井は奈津子がタイプなようです…。

君のタイプは。(後書き)

茜って名前かつこよくないですか？  
憧れます。すごい好き。

だから茜はすごく良い子として  
書いていく予定です！ひいき気味に。笑



君に恋、その前に。

「もつとしつかり腰振れ〜!!」  
げっ、ロバ〜!!

うちと奈津子<sup>なつこ</sup>は授業後

テニス部の体験入部に来たのだけれど…。

なんと顧問が担任のロバ〜!!（本名：千葉<sup>ちば</sup>）  
ちよつと入る気失せる…。

「おお、市原<sup>いちばら</sup>と篠塚<sup>しのづか</sup>じゃないかあ〜」  
げげっ、見つかったちゃったよお…。

「あ。どおも…。」

テキトーにご挨拶。奈津子も引き気味だ。

「あ、繭<sup>まゆ</sup>ちゃんじゃない!! 久しぶり〜!!」  
ナイスタイミングで話しかけてくれたのは  
小学校の時ハンド部でお世話になった  
漑<sup>みお</sup>先輩だった。

「漑先輩!! 先輩もテニス部ですか?」

「そーだよつ。あ! 奈津子ちゃんだっけ?  
大人っぽくなったね〜!」

奈津子はハンド部の選手じゃなくて  
マネージャーだったから先輩もうる覚えみたい。

「漑ちゃん先輩〜! 会えて嬉しいで〜す」

そーこー話してたらいつのまにか  
口バもいなくなっていた。やったっ

「繭ちゃんハンドも筋良かったし、  
テニスもきつとすぐ出来るよ！  
ちよつと顧問ウザいけど是非入ってね！  
もちろん奈津子ちゃんも！」  
「はいっ」

テニス部いいなあ！雰囲気もいいし  
漣先輩いるし！第一候補っ

「繭ちゃん、どーする？」  
「うち、ここ入りたいかもなーって。奈津子は？」  
「繭ちゃんが入るなら奈津子も入るよー」  
「なんかうち責任重大じゃん！自分のやりたいのやればいいよ？」  
「いいの！繭ちゃん居ないところは考えられないもんっ！」

奈津子ほんと大好き。ずっと一緒に居よう。

「てかさあ繭ちゃんさ、」  
「んっ？」  
「晴哉はるちゃんと楽しそうだよねー！」  
「え、そ、そうかな？まあ面白いし！」  
「そっか。あのさ、  
奈津子が言うことじゃないかもなんだけどさ…」  
「えっ何？」

急に辺りがシンとした気がした。

「中学生生活楽しむにはやっぱ、  
飛鳥<sup>あすか</sup>くんとちゃんとキリつけたら…？」

あ…。

奈津子の言葉が重かった。

すっかり忘れてたよ。飛鳥のこと…。

「そ、そーだよねっ。うん、今日あたりで  
何とかしてみようかなっ。」

「繭ちゃん大丈夫？ついていこうか？」

「へーき！うちの問題は、うちで片付けないとね！」

奈津子に迷惑はかけられないよ。

「じゃ、そのこともあるし

うち先に帰るね！明日テニス部の感想教えて！」

「うん、わかった…。繭ちゃん大丈夫？」

「大丈夫だって！じゃねっばいばい！」

「ばいばい…。」

そーだよ、うち…。

こんなんじゃ中学生生活

何にも楽しめないよ…。

飛鳥に会わなきゃ。

会わなきゃ何も始まんない。

待ってて、君…。

君にちゃんと恋ができるように。  
準備がなりたいんだ…

。

君に恋、その前に。(後書き)

なんか最後の方が重くなりすぎちゃったかな？  
飛鳥という謎の男について

次話からしっかり触れていきます。  
是非読んでください。

君と会おう前。 - 消えない過去 -

それは小学6年生の夏だった。

「俺<sup>まゆ</sup>つ繭ちゃんが好きなんだ!!  
付き合ってください!!」

びっくりした。

彼はクラスメイトの園崎飛鳥<sup>そのさきあすか</sup>。

そんな頻繁に喋ったことはなかったけど  
普通にカッコイイなと思ってた。

女子からも結構モテる。

そんな彼がうちに告白なんて…!!

「またまた〜! 飛鳥くんからかってんの?  
うちなんか急に告白なんて…」

「本気!! 大マジだよ!」

必死な表情で訴えかけてきた飛鳥に惹かれた。  
普通にこの人いいなって思った。

「いいよ。付き合おうか。」

教室がひゅ〜ひゅ〜とわめき立てる。

「繭! おめでと〜!」

「繭ちゃん、よかったねえ」

親友の茜あかねと奈津子なつこも祝福してくれた。

「繭ちゃん！よろしくね！」

「うん！飛鳥くんも！！」

このときはすごい幸せで。  
ただただ幸せで。

彼と居て、彼と過ごして、  
何にも不満なんてなかったのに…。

うちが悪かったのかもしれない。  
てかうちが悪かったんだ。

うちがいなければ

飛鳥がこうなることも

なかったのかもしれない…

。

飛鳥と付き合い始めて  
3ヶ月が経った。

「繭、今日学校帰りヒマ？」

「ごめん飛鳥、部活の大会近くて  
しばらくは遊べない…。ごめん。」

「そっか、じゃあバイバイ繭。メールして。」

「うん。バイバイ。」

大会なんてない。もう夏のうちに  
とつくに優勝して終わった。

最近疲れたんだ。うちって面倒くさがりだから。

ごめんね飛鳥。飛鳥は何も悪くない。

そんなのわかってた。

でも自分が悪いって思いたくなくて。

「繭、もうハンド行かなくていいんだよ？」

「そーだよ。繭ちゃん。飛鳥ちゃんと遊んだりしないの？」

茜と奈津子も心配してくれてる。

「…うん。ま、飛鳥よりハンド！かな…。あはは。」

正直別れたかったんだと思う。

嫌いになった、とかじゃない。

最初から好きじゃなかっただけ。

ただうちは弱くて。すごい弱くて。

ただ飛鳥から逃げることしかできなかったんだ。

それから飛鳥を避け続けた。

教室でも全然話さなくなった。

メールも必要最低限返さない。

そのせいなのかな？

飛鳥は変わっていった。



ある日、飛鳥の髪が茶色になった。

ある日、飛鳥の耳に穴が空いた。

ある日、飛鳥が学校を休んだ。

それからしばらく飛鳥は学校に来なくなった。

「繭、飛鳥くんどうしちゃったの？」

「最近連絡取ってないからわかんないよ…。」

「繭ちゃん彼女ならもっとしっかり管理してあげなきゃ…、」  
「わかってるよ!!」

初めて茜と奈津子に声を荒げた。

「今日家行ってくるから…。ごめん大声出して。」

もう飛鳥の話はしないで…。」

「繭…。」

「ごめん…繭ちゃん。」

飛鳥の家に行くことにした。

話すこととか何をするのかとか

何にも考えずにとりあえず向かった。

それがいけなかったのかな。それが悲劇を生んだのかな。

ピンポン

「はい。」

飛鳥とは思えないほどの  
低い声が返ってきた。

「飛鳥？繭だけど。」

「何しに来た？」

「え、まあ…いろいろ？」

「入って。」

ブチッとインターホンが切れて  
マンションの自動ドアが開いた。  
あまりにも変わり果てた様子の飛鳥が  
少し怖かった。

106 園崎とかかれたプレートの張られたドアが開いた。  
「久しぶりだね。飛鳥。」  
「上がって。」

相変わらず冷たい飛鳥。  
飛鳥の髪は金髪になっていた。  
ピアスも片耳に3個もついてて  
ところどころ体に傷もあった。  
家もすごくタバコ臭い。

「飛鳥けんかとかしてるの？」  
「…まあ、たまにね。」

「タバコも吸ってる？」  
「悪いの？」  
「い、いや…。」

涙が出そうになった。  
飛鳥の目には光がなかった。  
まるで枯れている。真っ暗な瞳。

「どうして…」  
「何？」  
「どうして、こーなっちゃったの…飛鳥…。」

次の瞬間、うちは飛鳥に突き飛ばされた。

「あ…飛鳥…？」

怖い怖い怖い怖い。

「誰のせいだと思う？繭だよ！！繭のせいだ！！」  
怖い怖い怖い怖い。

飛鳥はうちの上に馬乗りになる。

「やめて、や…やめて！！あ…飛鳥！！」

「お前のこと大好きだったのに！

好きで好きで好きで好きで…

好きでしようがなかった！！なのにお前は…！！」

飛鳥は何度も何度もうちを殴った。  
痛い痛い痛い痛い。

飛鳥の枯れた瞳から涙がこぼれてる。  
殴られた傷に飛鳥の涙がしみた。

「繭のせい！！繭のせい！！繭の…！！」

うちのせい…。

意識がとおのいていく。

うちのせい…？

うちのせいなの…？

ここまで飛鳥を傷つけたのは…

そうだ、うちだ。

うちの痛みとは比べ物にならないくらい  
飛鳥は痛くて苦しかったんだね…。

ごめん、ごめん、飛鳥。

ごめん…。

そこから、うちの意識は無くなった。

君と出会う前。 - 消えない過去 - (後書き)

意外な繭の過去。

ちよつとストーリーのタッチ

変わりすぎたかな？

次話もぜひ読んでください。

飛鳥。ありがとう。

「ん…。」

目が覚めた。

うちはベッドの上に居た。

ここはどこ？

「<sup>まゆ</sup>繭…！！」

<sup>あすか</sup>飛鳥が涙でぐちゃぐちゃの顔で言った。

そうだ、うち…。

飛鳥に殴られて  
気を失ってたんだ。

ここは飛鳥の部屋。

「よかった…繭…

ほんとごめん！俺…どーかしてたよ…。」

いつもの優しい飛鳥だった。

「うちこそ…こんなに飛鳥のこと  
傷つけてたなんて…。」

「ごめんね…？」

飛鳥が変わってしまったのは  
うちのせいだから…。

「繭が無事で良かった…良かったよお…!」

いきなり飛鳥が抱きしめてきた。  
温かった。

飛鳥の愛を心から感じたよ。

でも……。

うちは飛鳥の腕を優しくほどいた。

「飛鳥ごめん…。やっぱ…うちら…。」

別れよう…。そう言いたかったけど…。  
うちは弱くて。言えなくて。

「やだかな…。」  
え…?

「別れるなんて  
言わないでくれ…。」

飛鳥はうちの表情から何かを察したんだと思う。  
飛鳥…。そんなに泣いたら涙枯れちゃうよ。

「ごめん、と、とりあえず帰るから…。」  
うちはベッドから降りた。

「じゃあ…。たまには学校来てよね！  
ほら、修学旅行とかあるしさ…。」  
「うん…。」

飛鳥は笑ってくれた。  
すごく悲しそうな顔で。

「ばいばい。」

「…ばいばい。」

次の日、ほっぺの傷を  
みんなから心配されたけど  
転んだって言った。

「繭ちゃん、まさか…飛鳥くん…？」  
奈津子<sup>なつこ</sup>にだけは勘づかれたけど。

「そんなわけないじゃん！！  
飛鳥がそんなことするわけがない！！」  
全力で否定した。

そして季節は巡った。  
結局飛鳥は修学旅行にも卒業式にも来なかった。

そして…うちは中学に入学。  
一応飛鳥も椎名<sup>しいな</sup>中学に入学はしてるみたいだけど…。  
一度も見たことはない。  
何組かも知らない。

やっぱこんなんじゃないダメだよね…。  
こんなんじゃない…。  
中学校で青春したいもん。  
強くなれ！強く！！



うちは今飛鳥のマンションの前にいる。  
106はもう押してある。

あとは呼出を押すだけ。

あともう少し強くなるだけ。

ピンポン…

「繭っ…！」

インターホンではなく後ろから声がした。

「飛鳥…。」

振り向くとそこには

ジャージに黒髪の飛鳥が立っていた。

「飛鳥あのね…。」

「何も言っ…。」

ひゃっ…？

飛鳥がうちを抱きしめた。

「あの日のことは本当にごめん…。」

「いいよ…気にしてない…。」

「うそだ。」

「え…？」

「繭ふるえてるよ。俺が怖いんだろ。」

「ち、ちがつ…ちよつとびっくりして…。」

ほんとと怖い。ちよつぴり怖いよ。

飛鳥って何でもお見通しだね…。

「別れていいから…」

え…？

「繭が別れたいなら別れるから…！  
お願いだから軽蔑しないで…。」

「飛鳥…」

飛鳥は強く抱きしめてた腕をゆるめた。  
飛鳥は泣いていた。

「俺さ、いろいろあつたけど  
やっぱみんなに会いたくて  
学校行きたくて。」

髪も黒くしたし心も落ちついたんだ。  
だから明日にはもう椎名中に行こうと思ってたんだ。」

飛鳥…。

「飛鳥！！嬉しいよ…！！でも…。」  
「いいんだ、繭。」

束縛する気はないから。  
別れてもいい。  
でも約束してくれ…。」

飛鳥の顔がくしゃっと崩れた。

「俺と会ったら

いつでも笑ってほしい！！

俺は…繭の笑顔が大好きだから…！！」

飛鳥…！！

こんなにもうちを愛してくれて。  
ほんとにほんとに愛してくれて。  
なののうちは…。

全然飛鳥に答えられなくて。

何一つ返せなくて。

ごめんね…飛鳥…

「ありがとう…。」

最後にこちらは優しくキスをした。

すごく優しいファーストキスだった。

飛鳥との最初で最後のフレンチキス。

「じゃあね、飛鳥。明日学校でね！」

「うん！俺、7組だから！いつでも来いよ！」

「もち じゃあ…！」

「ばいばい！！繭、その笑顔。大好き。」

「ん？何か言った？」

「何にも！！ばいばい」

飛鳥はもう彼氏じゃない。

ただの友達。

でもでも、

とっても大切な

ただの友達。

飛鳥大好き。今までありがとう。

うち次はもつといい恋愛しなきゃね。

彼氏を傷つけたりなんか

絶対にしちやいけないな。  
飛鳥に怒られちゃう。

大切なことを飛鳥が教えてくれた。  
飛鳥のおかげで強くなれたよ。  
飛鳥…お互い次はいい恋をしよう。  
うちらには明るい未来が待ってると思うから…。

その時のうちは  
とんだ勘違い野郎で。

うちは強くなれたって思ってた。  
でも強くなんか少しもなってなかったんだ。

強くなったのは飛鳥だけで。  
うちは何も変わってなくて。

うちがそれに気づくのは  
もっと先のことなんだけど…。

飛鳥。ありがとう。（後書き）

ここまで読んでくださり

ありがとうございます。

次話もぜひよろしく願います。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6223y/>

---

君。

2011年11月29日16時50分発行